

久保田健一郎会員（大阪大学大学院生）

教育思想史学会第11回大会は、研究者の道を歩み始めたばかりの私にとって、決して忘れ得ぬ学会となろう。それは、私をはじめその足を踏み入れた学会であったという理由だけではない。二日間に渡る議論において通奏低音のように鳴り響いていたテーマが、私の暖めているテーマと大きく交錯していたのである。それは、言語によって語り得ないにも関わらず、「他者」という言葉で語られてしまうといった悲劇的なテーマである。本学会は、近代教育思想を見直すことを目的としていると聞くが、その近代教育思想とは他でもなく私たちの教育観の自明性を支えるものであって、それは自らの地盤を掘り崩すといった自己破壊的な作業であろう。その作業の中で、近代教育思想の根底にある「他者」性の喪失という事実が浮彫りになったのではないか。その結果として、「他者」という通奏低音が、時には議題にのせられることによって主旋律へと踊り出て、時には光景に退いて議論を背後から支えることによって、二日間に渡って流され続けていたのではないか。

学会の直前に、そのテーマは「あの事件を教えることの困難さ」という明確な形をとって、私に迫っていた。それは、火曜日の夜に、二つの高層ビルの見慣れぬ姿を目にしたことから始まっていた。私は翌日の朝に非常勤の授業を控えていた。その授業は、「死と物語」というテーマで行っており、故にあの事件は決して避けては通れない出来事と思われた。しかし、私にはいくつかの疑問が浮かんだ。言語によってあの事件を語ることは可能であろうか、また、授業で扱っても切り詰められた知以上のものは伝えられないのではないか。また、あの事件の根底には異なる「物語」に生きる人との関係の問題があることは明らかであり、それは「教える-学ぶ」関係にも容易にシフトされることも脳裏によぎった。こうして、様々な状況で論じられる「他者」というテーマが、「あの事件を教えることの困難さ」という形に凝縮され、私に切実に迫ってきていたのである。

これは学会とは無関係な私的なエピソードに聞えるかもしれないが、日々の鍛練の結晶とも言えるそれぞれの意欲的な発表への感想も、この「困難さ」を論ずる中に残らず凝縮されているのである。このように、本学会における思想的な議論は、実際は日常の教育問題そのものを論じていると思われる。しかし、その議論に実践への一元的な回答を求めてはいけないただろう。日々の教育は立ち止まることなく行われ、そして、私は困難さを感じながらもあの事件を授業で教えている事実気づき、同時に私はその事実安住しようとしている。そんなとき、事実の安易な肯定を拒絶し、自らの教育へと自己破壊的に立ち向かう真摯な姿勢こそが、私が本学会の活発な議論から学んだことである。